

月刊
JMITU

セガ

新型コロナ対応版



「焼け残った電柱」(レプリカ)をコラージュ

9月号

日本金属製造情報通信労働組合大田地域支部
セガ グループ分会 2022年発行

No.453

秋闘・年末一時金要求 半期の目標設定は無意味？

春闘回答の際に年末一時金 回答係数2.0予定

私たち労働組合は、夏季一時金を春闘で、年末一時金を秋闘要求で要求提出をしていますが、今年の会社からの春闘回答の際、年末一時金についても係数2.0予定だと回答されました。

会社「年間でBP等、決めているのでその際にある程度決まってしまう。」
組合「成果主義を導入している中で先に係数が決まってしまうていたら、頑張っても上がらないし、逆に頑張らなくても支給されると思い、モチベーションは下がるのではな

いか。」

会社「そんなことはない、今回のように夏季一時金の方は係数が上がっている。頑張れば翌年の夏季一時金にのる。」

夏季一時金の人事評価期間は、10月1日から3月31日、年末一時金は、4月1日から9月30日となっています。3月の時点で年末一時金の係数がわかっていたら、やはりモチベーションは上がらないのではないかと。

係数2.0という事は、総額原資は決まってしまうている。総額原資が決まっている中では、一時金を増やすには部門もしくは職場の中での原

資の奪い合い。そこからはチームワークなどというものは生まれてこなくなる。自分や部門の評価にならない業務は行わなくなる。

技術の継承はしなくなり、自分の仕事を抱え込んでしまう。リスクを負う提案などはない。

年間で係数が決まっているのであれば、目標設定も半期ごとで行う必要があるのだろうか？昇給と同じように年間を通してでも良いのではないかと？

どんなに上期に会社全体が利益を出し頑張ったとしても年末一時金の係数が上がらない。

そもそも、昇格の条件もあいまい、評価の基準もあいまい、部門間での公平感もない。組合としてはこの成果主義賃

金には、反対しています。

今までに、春闘で年末一時金の係数についての話はありませんでしたし、私たちも夏季一時金しか要求していませんだったのでそれについては聞いていませんでした。

しかし、もう一つの労働組合の方では、年間で一時金の要求を行っている。春闘の際に、年間の回答を会社もしている。その中で片方の労働組合には、年間の回答をしているのに、要求していないからとはいえ、回答しないのは組合間差別になり、不当労働行為になると会社も判断したのか、こういう形で回答してきたのかもしれない。

私たち労働組合は、あくまで会社の回答は予定なので、係数上乘せを、今秋闘では、要求していきます。

仙洞田一彦

市蔵は定食屋で、おでん定食をつまみ代わりに一杯やっていた。食堂のテレビには、エリザベス女王の国葬の様子が映っていた。

しばらく前に街で耳にした「親ガチャ」という言葉が脳裏に浮かんだ。この画面で、この言葉の連想、使い方があっていいのかどうか自信はない。が、一人の人間が誕生する過程は、エリザベスだって、この俺だって同じだろうと思っただ。たまたま親が違ったんだ。生まれてから、御姫様、王女様、とか女王様とか呼ばれているうちに、本人もその気になってきた。そのうちに

自分だけは特別な人間だと思いきむ。本当は特別でも何でもないのにな。

画面が切り替わった。有名な人のせがれがニュース解説をしている。聞きながらあの程度のことだったら俺でも喋れると、市蔵は思った。何が違うかって言うと親が違うんだ。あいつだって、周りからちやほやされているうちに、自分は才能のある人間だと思うようになってしまったんだ。人間なんていうのは、そう違わないものさ。違ってたまるか。「ここ、いいですか」四十くらいの若い男が、はすかいの椅子を、すでに引きながら言った。「ああ、いいよ」言いながら店内を見ると席がふさがっていた。ここは席

の全部が四人掛けのテーブルで、それぞれの四人掛けに、一人づつ座っていた。だから客は全部で十人もいなかった。男は腰掛けて、市蔵の前に並んでいるものをちらっと見て、店員におでん定食とビールを注文した。

ちよつと緩んではいるがネクタイをし、夏物のスーツを着ていて、ごく普通のサラリーマン風だった。市蔵はこの店に一週間に一度くらいは来ているが、見掛けない顔だった。すでに顔が赤くなっているから、どこかでもう一杯やってきたのかもしれない。店員がビールを持って来て男の前に置き、すぐまた盆の上に市蔵の前に置いてあるのと同じおでん定食を載せて持ってきた。

男はジョッキを傾けてビールを飲んだ。減ったのはわずかだったから、形だけ口に当たったのか。ジョッキをテーブルの上に置き、手はジョッキを握ったまま市蔵に言った。「おじさん、僕、そんなにダメな人間に見えますか」

見かけはそれ程ではなかったが、もう呂律が回らない。いきなり話し掛けられて、びっくりした。「なんだ、いきなり」「すみません。僕、そんなにダメな人間に見えますか」繰り返した。息子だと言っても通りそうなくらいの年齢差には見える。男の言葉に、周りの客の視線が集まった。中には笑みを浮かべているのもいた。酔っぱらいに絡まれて気の毒な、というよう

な同情の顔もあつた。

「ダメな人間なんていないさ」

市蔵は答えた。

「アツ、いい事言ってくれる。ありがとうございます」

男は右手を差し出した。泣き顔だったが、握手を求めた手だ。市蔵も手を出して握手を受けた。

「僕ね、どこの会社に行ってもダメなんだ」引いた手を膝の上に置き、頭を下げると小さな声で言い続けた。

「事務の仕事も、力仕事もダメ。パソコンも使えないわけではないけど、ちょっと難しくはないと付いていけない。力仕事をしたときもあるけど、重いものを持たされるとフラフラするし、何をやってもダメ。何をやってもうまくいかない。だめだあ」

「数ある仕事には、向いていないものもあるんじゃないか。いろいろやってみりゃいいじゃないの。まだ若いようだし」

励ましが通じるかどうか分からないが、こういう男は励ますに限ると思つて言つた。

そうするとイヤイヤするよりに首を振りながら言つた。

「僕はダメ人間です」

そういうとジョッキをしっかりと握り、ビールをあおつた。ビールが、ジョッキの半分くらいになった。いままで箸をつけてなかつたおでん定食を食べはじめた。

「頭から、自分をダメ人間だと決めつけてはダメだ」

市蔵が言つた。男は箸を置いてうつむくと答えた。

「周りもダメだと言うし、自分でもそう思うし。何をやっ

てもうまくいきません」

今度はべそをかいた。

「だから、それが決めつけというんだよ。なにくそつてがんなるんだよ。いいな」

「はい。はい。はい」

男はうつむいたまま、何度も肯いた。

「まあいいから、食べる。ビールを飲んで元気を出せ」

「ありがとうございます」

男は顔を上げて、また箸を取つて食べ、残り少なくなつたビールを飲みほした。市蔵は男がかわいそうに思えてきて、店の奥に向かつて言つた。

「ビール、二丁」

「ハイ」

返事がして、ジョッキが二つ来た。市蔵はジョッキの一つを指して言つた。

「これは俺のおごりだ。元気

を出せ。乾杯しよう」

市蔵がジョッキを持ち上げて前に出した。男が申し訳なさそうに恐る恐るジョッキを持ち上げ、打ち合わせた。

ビールが空になると、男は元気になるどころか、さらに肩を落とした。そしてそのまま、しおしおと店を出ていった。後姿に「がんばれよ」と市蔵はつぶやいた。

市蔵も、残つたビールを飲み干すと立つた。それを見た店員が持ってきた勘定書きは二枚、定食も二人前、飲み物も二人分ついていた。間に合はずもないが、あわてて戸を開けて外を見たが、男の姿はすでになかつた。

「やられた。ダメ人間は俺の方か」と、苦笑いを浮かべ、ひとりごちた。